

『ゆけむり史学』第十二号の刊行によせて

白 峰 旬

今年度の大学院歴史学専攻(博士前期課程)の修了生は、西本朗崇、吉田翔馬、高妻朗久の三氏である。三人の修士論文のテーマは、西本氏は「義演准后日記」に見る二重公儀論の実態について」、吉田氏は「大分県における評価選別の基準を文書の残存性から見る―大分県米軍接収地問題を例にとつて―」、高妻氏は「電報記録史料の研究―西南戦争における長崎県の電報記録と情報―」であり、三人ともそれぞれの問題関心に基づいた力作である。

吉田氏と高妻氏の修士論文は、そのタイトルからわかるように、アーカイブズ学の学問領域に分類されるもので、歴史学という視点にプラスして公文書の記録保存という視点から分析されている。吉田氏と高妻氏は本学の大学院歴史学専攻(博士前期課程)において、針谷武志教授が指導教員であり、その御指導を受けて修士論文を執筆された。吉田氏と高妻氏の修士論文を拝読すると、歴史学とは異なる視点での考察が随所に見受けられ大変勉強になる。

西本氏は、私が指導教員として、大学院の近世史演習の時間に、いろいろな先行研究の参考文献、論文などのほか関係史料を講読して、その都度、修士論文の作成に向けて論点になり得る諸点を議論

したり話し合ったりすることができた。西本氏の修士論文を拝読して、こうした勉強成果が同氏の修士論文にはうまく反映していると実感できた。

私が担当する大学院の近世史演習は西本氏のほかに吉田氏も受講していたので、私も含めて三人でいろいろな学問上の論点について、或いは、史料上の解釈などについて、それぞれ意見を出し合って話を進め論点の理解を深めることができたのは、大学院教育の大きなメリットを活かせたと思っている。

こうした点は、本学の大学院歴史学専攻のよき伝統でもあると思うので、今後も大学院歴史学専攻に新入生を向かえて、こうした伝統を引き継いでもらいたいと願っている。